現役大学生が知りたい〇〇〇のこと。

明日の自分が好きになる方法

第６回 趣味と仕事と魔人ブウ

インタビューを受けたひと

本広克行さん

演出、映画監督。『踊る大捜査線』TV シリーズのチーフ演出、同映画シリーズの監督を務め、日本アカデミー賞優秀監督賞を受賞。一躍人気となる。また、大のアニメオタクとしても知られ、総監督として自身初のアニメ作品『PSYCHO-PASS』を手がける。2013 年から故郷香川県の『さぬき映画祭』のディレクターを務めるなど、監督業以外にも多彩な才能を発揮。他、監督作品に『サマータイムマシン・ブルース』『UDON』など。

趣味と仕事と魔人ブウ

「好きなこと、趣味を仕事にしたい。」

こういう意見を周りから聞くたびに、私は少し首を傾げてしまう。

仕事はどうしてもきついもの。趣味はその疲れを癒してくれるもの。だから、趣味を仕事にしてしまったら、逃げ場がなくなってしまうのではないか。その趣味を好きだという気持ちが薄らいでしまうのではないか。また、自分の思い入れが強いからこそ人とぶつかった時にしんどい想いをするのではないか。自分のやりたいことと違う仕事が来たときに余計つまらないと感じてしまうのではないか……不安はとめどなく溢れる。そういう不安から、私は自分の好きなものを仕事に直結させたい、とは素直に言えなかった。

本広監督は、自分の好きなものを仕事に直結させた人だ。自身の好きだった映画に携わることを生業に選んだ監督は、そのために生じるストレスや苦しみとどのように対峙しているのだろう。

「趣味を仕事にすることの難しさ、というものはありますね。なんでこんなことやんなきゃいけねえんだろなあと思う仕事もある。特にCMとかは自分には決定権がない。自分が作ってもスポンサーの人が嫌だと言ったら変えざるを得ない。そういうときにもね、中庸であれ、って思うんですよ。」

第三回でも触れた「中庸であれ」。会話やコミュニケーションの中だけでなく、ストレスに耐えることにも役立つのか！と私が感激していたところで、本広監督が「あとまぁ幼稚なんですけど」と付け加えた。

「まぁ幼稚なんですけど、自分の中にすごい強い敵をイメージするんですよ。ドラゴンボールの魔人ブウっていう……。」

ここで一同から笑いが起こった。私はみんなと笑いながらも少し困惑した。え？魔人ブウ？？　あのピンク色で太ってる……？

「昔ロボットにいた時はCMの仕事を一切やらなくて、自分の映画の宣伝のためだけにやってたんですけど。今外に出てからやっぱりCMもやんなくちゃいけない状況になって、もう本当にふざけんなよって思うことがいっぱいあって。スポンサーも注文つけてくるしクリエイティブもどうせお金でしょー？みたいな感じでやる気もない。そういう時は、俺は魔人ブウなんだ、どんなにやられても強いんだ、やられたらやられただけ大きくなるんだーみたいなことをイメージしながら夜の道を歩くんです。」

ドラゴンボールに登場する敵・魔人ブウ。

年代としては少し離れるものの、私もその存在は知っていた。魔人ブウは強力な回復力の持ち主で、主人公たちに何度やられても復活するのだ。確かにあの回復力は魅力的だけれど、自分が魔人ブウだと言い聞かせるという発想には驚いた。

こんなこと初めて人に言うよ、と照れながら笑う本広監督。やった！　本邦初公開！！！　と心の中でガッツポーズ。インタビューする身としてこんなに嬉しいことはない……と私が束の間の喜びに浸っていると、本広監督は少し声のトーンを落とした。

「好きな映像を仕事にして、しかも沢山お金がもらえる仕事をしているわけだから、そこはぐっと我慢しないといけないなと。ただ、今はＣＭでもテレビドラマでも、みんな、ほんとはそんなことしなくていいのに、そうせざるを得ない事情が沢山あるんだと思う。今ドラマがつまんなくなっていると言われるのも、ちょっと変なことをするとすぐクレームが来る風潮があるせいだと思うんだ。」

今はクレームが来やすい社会。何か問題のある放送があればすぐＳＮＳで拡散され、騒ぎが大きくなってしまう。スポンサーから取り下げてくださいと言われたら従うしかない。インタビューをした四月は、ちょうどつい二か月ほど前に某テレビドラマの演出に問題があるとして物議を醸したばかりだった。孤児院を取り扱ったドラマで、そのショッキングな演出ゆえにクレームが入り、テレビ局は謝罪の対応をするにまで追い込まれた。このような風潮を目の当たりにしながら育っているからこそ、今の若者は臆病になっている面があるのだと思う。クレームが来たら直さなくちゃいけない、自分のやりたいことを諦めなくちゃいけない、と。

この臆病な若者の意見に、本広監督はうんうんと頷いてからこう言った。

「諦め方、だよね。全部を放棄するんじゃなくて、その言い分もわかるんだけどって飲み込む。それこそ魔人ブウみたいに。やることは一緒なんだけど、心構えでだいぶ変わる。俺は今度そういう攻撃に遭っても頑張るぞって思ってる。そういう時に夜道をずーーっと歩くんですよ（笑）。延々と、三、四時間くらい歩いて朝になっちゃった時もある。ひたすら歩

いているとまあいっかって思い始めて、気持ちがリセットされて頑張れる。動けるようになるんだ。」

そして、監督は「それくらい負荷があった方が人生は楽しい」と語る。

「悔しいことはいっぱいある。社会の中で生きていくにはそれはしょうがないことだと思う。でもそれくらい負荷があった方が人生は楽しいんじゃないかって思えるようになってきて。すごい金持ちの社長さんとかつまんねえだろなって思うもん。みんなが言うこと聞いてたら最悪だな～って。」

本広監督はテレビの世界から映画監督になった、微妙な立場にいる人だ。だからこそ色んな人に何か言われてストレスになることも多かったという。

「ほんとにひでえこと言われるんだよ、監督って。お前みたいな能無し、みたいなことを普通に役者から言われて。二度とこいつとはやらねえって思いながらも歩くと段々忘れていくんだよね。不思議だけど。いやぁ強くなったなぁって。ストレスを楽しめるようになるにはトレーニングかな。」

本広監督は強い人だ。それは今まで負ってきた傷の数が多いからだろう。かつて映画監督を目指して専門学校に入ったものの、そこには挫折だらけの日々が待っていた。監督曰く、「入学して三日でこの業界食えないってわかる」という世界。映画だけじゃなくてもいいか、と思いCM制作会社でアルバイトを始めるも辛い日々。体中にじんましんが出て、吐きそうになりながら通っていたという。しかし一年経ってから「お前は向いていない」とクビにされた。こういう挫折を何回も繰り返してきたからこそ、今の「ストレスを楽しめる」本広監督がある。

そうだ。私には挫折の経験が足りない。

好きでやっているのに辛いことなんていくらでもある。生きている限り百パーセント自分の好きなことを出来るわけなんかないのだ。学生生活でさえ、自分で目指して入った大学で、自分がいいと思って入ったサークルで、自分で志望して入ったゼミで……とそれぞれの場で辛かったり理不尽だと思ったりすることがある。きつさの違いはあるかもしれないが、結局どこへ行っても同じなのだ。「好きを仕事にしたい」と怖くて言えない私は、負荷から逃げていた証拠だ。

どこに行っても出くわす理不尽なら、少しでも「好き」の近くにいた方がいい。そして何度でもぶつかって、ストレスを楽しめるようになろう。

出くわした理不尽との戦い方は、本広監督に教えてもらったのだから。

「理不尽だなあって思うことが君らにはいっぱいあると思うけど、その時にはぜひ魔人ブウを使ってください（笑）。」

まぁこれ、鳥山先生のだけどね、と笑う本広監督はとても格好良かった。

越知恭子（おち・きょうこ）
慶應義塾大学文学部２年

過去の色んな苦労話をユーモアを交えながらお話してくださった本広監督。
終始笑い声の響くインタビューとなりましたが、監督が最後一瞬だけ席を外していた間に、
ご同行いただいた映画製作コーディネーターの羽田さんが
「あの人相当苦労してるんですよ」と仰っていたのが深く印象に残っていました。
苦労を乗り越えたからこその監督の和やかな人柄がこの記事を通して伝わればいいなと思っています。

若者の夢の実現を応援するため IPG は、大学生がインタビュー・執筆したものを G-PRESS WITH NEXT GENERATION として発行しています。

※ロヴィ、Rovi、Gガイド、G-GUIDE、およびGガイドロゴは、米国Rovi Corporationおよび／またはその関連会社の日本国内における商標または登録商標です。
記載されている会社名、製品名は各社の商標、または登録商標です。

interactive Program Guide